

災害史研究～京都歴史災害データベースの構築

研究担当者：立命館大学文学部・教授 山崎 有恒

研究目的

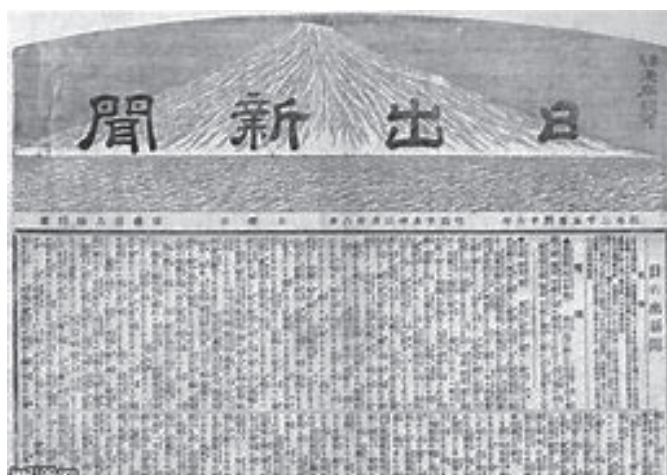
近代京都の歴史災害データベースを作成する。具体的には、『京都日出新聞』より人海戦術にて災害関係記事をすべて拾い出し、5W1Hをまとめデータベース化する。その際特に人間の災害に対する「意識」や人間と災害との関係性が読み取れる記事については、【重要】として、全文活字化の上、災害記事史料集に収録し別途刊行する。こうした作業を通じて、近世の日本人が抱いていた災害との「共生」意識が近代化・西欧化の中で、科学技術を導入しての災害封じ込め・克服へとシフトしていく過程を明らかにし、それが地域住民の災害に対する意識低下や、先祖から伝えられた減災の知恵の不継承、ひいては現代の防災計画・政策の根本的な問題点につながっていることを明らかにすることを目的としている。

成果の概要

本年度も昨年に引き続き京都歴史災害史料研究会を組織して、研究活動を続けたが、コロナの影響が深刻にあり、多くの研究会をリモート開催としたため、作業が順調には進まず、当初計画の3分の1程度しか達成できなかったことは痛恨の極みであった。それでも明治初頭の10年間の作業を終え残りはラスト12年分となった。これについてはなんとか2024年度中には完成させたい。

研究成果の詳細

明治10年代の『京都日出新聞』の災害記事から見てきたことは、近世的自治消防体制から近代西欧的な行政主導による防災システムへの転換であった。とは言え、そうした転換がスムーズに進められたわけではなく、旧体制を良しとする反動的な動きや、新しいシステムになじまない人々など、移行期らしい問題点が噴出していった。そして新システムの下で小さな火災は頻発しつつあった。これがその後の10年間でどのような変容を遂げていくのかは2024年度の大きな課題である。



今後の研究計画・展開

2024年度も本年度に引き続き、京都歴史災害史料研究会を継続し、懸案のデータベース戦前編の完全なる完成を果たしたい。その後はその成果を取りまとめる形で、研究書『近代京都の歴史災害―『京都日出新聞』に見る―』を京都新聞出版より刊行する予定である。

その他特記事項

特になし

若手研究者育成のための取組

研究会には若手の講師、大学院生に多く参加してもらい、彼らにとっての業績にもなるよう取り組んでいる。またこの研究会への参加でリーダーシップを身に着け、大学教員への道を切り開いた人間が数人いる。